

第4回景観委員会で審議された内容に関するご意見と対応について

1. 各委員からの意見の概要・対応(キーセンテンス総括表)..... 1

平成 18 年 6 月 27 日

1. キーセンテンス総括表

条例・関連計画、沿川の歴史的背景、現況景観の特徴、委員会（第2回まちづくり検討委員会・第3回合同委員会・第4回景観専門委員会）での想い・意見から導き出された、景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（キーセンテンス）を整理した。

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（景観に関する法律・条例等）					
		上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係ると思われる事項	景観に関する法律・条例等	大橋川の位置づけ	-	-	-
		水辺景観の形成に関する方向性や課題	-	-	-
		市（県）全体の景観形成の方向性等	-	-	-

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（歴史的背景）

				上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係わると考えられる事項	歴史的背景	川と人との関わり			-	<ul style="list-style-type: none">・朝酌川合流点付近は釜と呼ばれる漁具が仕掛けられ、漁が行われた。また、朝酌掟戸から大井浜にかけて白魚漁が行われたと記されている。・朝酌川河口部の長田市場（「矢田の渡し」付近）は水陸交通の要衝に位置していたと考えられる・最下流部右岸馬潟（現 八幡町馬潟）は水陸交通の要衝で、戦国時代より江戸、明治にかけて、主として帆船の風待港として利用され賑わっていた	-
		文学作品にみる情景的要素	<ul style="list-style-type: none">・大橋は水に映って、岸から垂れさがり長い柳の影もすゞしい・大橋の向うの松江の町は漸く眠りから覚めたばかりのようで、岸のところどころには燈火が残っていた・湖水に浮かぶ長い大橋の眺めもちょっと江州の瀬田の橋を思い出させる・夕方には、大橋の方の柳の枝のかげあたりから、堤燈のような大きな月が上った（以上、4項目 島崎藤村「山陰土産」）・松江へ来て、まず自分の心をひいたものは、この市まちを縦横に貫いている川の水とその川の上に架けられた多くの木造の橋とであった。・水は松江を縦横に貫流して、その光と影との限りない調和を示しながら、随所に空と家とその間に飛び交う燕の影とを映して（以上、2項目 芥川龍之介「松江印象記」）・車があの名高い大橋にかかって、左に渺々たる宍道湖を、右に船舶や橋の河岸の家々が映った大川を眺めた時には、“ああやっぱり出掛けてきてよかった”と思った。（里見弴「ある年の初夏」）・ひろい鏡のような川口が、遠くの方にフルえるような物の影をうつしながら、冷たく光っている・家の庭先の、つい目と鼻のさきの川ばたから、かしわ手を打つ音が聞こえてくる。…かしわ手は、遠くの方…美しい小舟の群からもひびいてくる・大橋の上をわたるこの下駄の音は、忘れられない音だ（以上、3項目ラフカディオ・ハーン「日本瞥見記「第七章 神々の国の首都」」）・川っ縁で区切られた庭から若葉が伸び上がり、柔らかな緑の雲といった趣を呈している・途方もなく素晴らしい夢まぼろしの姿だ。大橋から東のかたを眺めると・・・きびしい線の美しさを見せる山並みを越えた更に向こうに、光に包まれた幻が一つ天にむかってそそり立つ・鉄柱の長い、白い橋は如何にも近代式である（第15代大橋）（以上、3項目ラフカディオ・ハーン「知られぬ日本の面影」）・大橋の上から宍道湖を見て、ぼやっとした、広い、きらめきを感じる・そういえばこの大橋川附近は、河幅からいっても、兩岸の様子からいっても、何となく明治中期の隅田川がちょうどこんなだったろうと思わせるところを持っている。大橋川の袂から発着する美保関通いの小蒸気船にしても、隅田川のポンポン蒸気にそっくりである。その黄い煙突のすぐ向こうに軒を並べた、鰻料理だの、川魚料理だのの看板をかけた店の裏座敷。対岸の柳の植わった川端路と、そこにずらりと並んだ宿屋、倉庫、白壁の土蔵といった類（以上、2項目 田端修一郎「出雲・石見」）・古びた木橋の松江大橋を人力車でわたり、・・・再び夕陽にそまった大橋をわたって行く（岡本太郎「日本再発見」）・川べりに旅籠屋料亭簷をつらねげに帆檣画柳煙の処（田中冬二「帆檣画柳煙」）・人通りの賑やかな大橋を下手に見て、水に映る向うの町家（徳富蘆花「死の蔭に」）・大橋のそばに貸ボート屋があった（里見弴「或る年の夏に」）・宍道湖の眺めは、松江大橋の上からの眺めが美しい（駒田信二「湖と私」）・宿の奥座敷の障子を寒そうにもなく開け放って、眼前の宍道湖を望む（河東碧梧桐「続三千里上巻」）・宍道湖の夕陽を一望のもとにおさめる庭に面した座敷（五木寛之「故郷に女ありて」）	-	<ul style="list-style-type: none">・中海へ出るまでの大橋川は溶々として碧流を湛え、兩岸の山野が南方支那の水郷風景を展開した（与謝野晶子「山陰遊記」）・しづかだ、だが、そのしづかさは眠ってゐるしづかさだ（立原道造「長崎ノート」）		
	かつての面影を残す場所	<ul style="list-style-type: none">・柳並木や新大橋左岸下流側のたもと付近は半世紀前の雰囲気が現在も残っている・25年前の大橋およびその周辺と現在とでは大きな差異は確認できない・明治末～大正期の上流部（宍道湖大橋～大橋）左岸の川沿いには当時から蔵が建ち並び、現在もその面影が残されていることが分かる・現在では右岸沿いに公園ができるなどの変化がみられるが、40年前も川に面して民家が建ち並び様子や売布神社の緑地部が確認できる	<ul style="list-style-type: none">・30年前も現在と変わらぬ嵩山、和久羅山からのびる稜線等が確認できる・30年前も現在と変わらぬ中流域の川と水田・水路などが織り成す大橋川独特の景観が確認できる	<ul style="list-style-type: none">・朝酌川合流点付近は、朝酌の渡しという渡船場があったとされ、「矢田の渡し」はほぼ同じ位置にある現代の渡しであり、周辺一体は朝酌郷の風景をよく残していると伝えられている	<ul style="list-style-type: none">・30年前も現在の売布神社や多賀神社などの緑地部が確認できる		

茶色字は第4回景観専門委員会からの意見をふまえ、新たに追加した事項

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（現況景観の特徴）

		上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係わると考えられる事項	現況景観の特徴	観光・歴史的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・「矢田の渡し」に観光機能を持たせた大橋川周遊遊覧船が航行している 		<ul style="list-style-type: none"> ・12年に1度行われる日本三大船神事の一つホーランエンヤは、大橋川の全域が会場となる。
		生活・文化的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・右岸側において集落や商業施設が川に隣接している範囲が多い ・中下流部の右岸側を中心に、ゴズ（ハゼ）、スズキ釣りが行われる 	<ul style="list-style-type: none"> ・「矢田の渡し」は、住民の足としての渡船事業が現在も継続されている ・川の両岸に集落が隣接している 	<ul style="list-style-type: none"> ・沿川道路は、景観を支配するような目立ったものはなく、市民の生活・文化の流れを汲む景観要素の一つとなっている ・石積み護岸は、明度のばらつきがやや目立つものの、護岸の見えるの高さが小さく水面との距離も比較的小さい。
		自然的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・嵩山、和久羅山からのびる稜線が確認される ・水田は、水際の湿生植生とともに大橋川の自然的な景観要素の一つとなっている ・水際部を中心にヨシ等の湿生植生が分布し、水鳥等の生息地として機能している 		<ul style="list-style-type: none"> ・全川で水の流れは比較的ゆるやかであり、多くの地点で水面から護岸上部までの差高が小さい
		情景的要素	<ul style="list-style-type: none"> ・源助公園は普段は落ち着いた佇まいをみせるが、春の桜が満開になると華やかな印象をあたえる ・朝霧に霞む大橋は、幻想的な印象をあたえる ・宍道湖に沈む夕日を背景にした大橋は幻想的な印象をあたえる ・市街地を貫流する大橋川の両岸では、夜になると、橋の照明、業務施設、飲食店の明かりが水面に映る ・宍道湖に沈む夕日は松江を代表する景観であり、多くの文人や観光客に賞賛されている ・上中流部は、大学や高校のボート部の練習や大会の場として利用される他、市民レガッタのイベントが開催される ・シジミは伝統的な鋤簾（じょれん）を使った方法で漁が行われており、朝もやの中で静かに営まれる ・明け方に宍道湖大橋などから下流方向を望むと、朝日に染まる川面と松江市街地が幻想的に映し出される 		<ul style="list-style-type: none"> ・大橋等を視点場として、晴天日にはるか遠くに確認できるのが名峰 大山である

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（第2回まちづくり検討委員会、第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見1）

		上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係わると考えられる事項	第2回まちづくり検討委員会、第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見	松江の風情	・小鳥のさえずりが聞えるような区域であり、そのことが大橋川沿川の誇りになる		・松江そのものの町が昔から静寂という言葉、あるいは静かさというものが代表的であった ・松江を全国で最も静かな町にする
		歴史・文化・風土・生活	・水郷的な風景となっている	8.宍道湖から中海までを一体的に考えたとき、多賀神社周辺の緑は大切なポイントであり、その空間を大切にするという意識を持つべき ・矢田の渡し周辺のかつての漁や市場の情景は、他の地方にはみられない極めて重要なところである ・下流部は「風土記」の時代からあまり変わらないような風景となっている	6.須賀都久神社や賣布神社のように、かつて水に接していたところが、今は水から隔てられている。水と神社の関係を大切にしてほしい 7.如泥石をはじめ、伝統的な護岸のデザインを再現できないか ・大橋川は幾つもの時代の施設やしつらえといったものが重なっている ・初代大橋ができて、（松江の）城下町の原点となるような形ができた
		自然・環境	9.中州は貴重な湿地であり、維持・保全すべき 10.中流右岸は河岸が直線的で生物多様性に欠けると思うので、生態系に配慮した変化のある河岸（エコトーン）にし、魚釣りや魚採りができるようにできないか ・河岸が複雑な形をし、水路が錯綜している ・叙情的なキーワードや生活文化のにおいがする ・自然の保護や保全が重要		

茶色字は第4回景観専門委員会からの意見

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（第2回まちづくり検討委員会、第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見2）

		上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係わると考えられる事項	第2回まちづくり検討委員会	景観・眺望	43.中州の水郷風景の保全 ・ 嵩山、和久羅山は、ある面では松江の象徴的な景色	44.風土記に思いを馳せる景観の保持 45.意宇川や茶臼山などの古代景観のすばらしさをもっと認識すべき 46.矢田の渡し 出雲国風土記 47.矢田の渡し周辺は風土記に描かれた景観を意識して整備し、渡し船を観光船に利用してはどうか 48.赤瓦の集落が移転で無くなるのは残念	11.広さ、ゆったりとした風景が必要 12.恵まれた自然景観を残すことが大切 13.大山隠岐国立公園を意識し、大山までを含めた景観づくりが必要 14.東の大山と西の夕日という東西に広がった空間で松江を見る視点が重要なポイント 15.常に見られる固定的な景観だけでなく、「朝霧に浮かぶシジミ舟」「遠くに見える大山」などの季節的なものも含め、時折見られる風景への評価も必要 16.相手（船や対岸）を見る・相手から見られるという意識を持ち合うことが、風景をもっと良くするためには必要 17.大橋川全域を景観法の景観形成地域に指定してはどうか 18.松江城、大山、嵩山などが見える視点場を設定した上で、景観法による景観規制を検討する 19.船からの景観による景観規制 20.この際、川沿いからなくしたいものを消す 21.松江は水際に風情があるので、そこをコンクリートで断ち切ると風情のない空間になってしまう 22.ホーランエンヤは大橋川を一体化する伝統行事であり、このホーランエンヤを楽しめるような河岸と景観であってほしい ・ 上下流を見通せるというのはおもしろく、都市的な場所から全然違うもの（緑の湿地）が見通せるというのはとても魅力的 ・ 今残っている漁港や船の係留場を排除するのではなく、生活を景観に取り込むような配慮が必要
	第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見				

茶色字は第4回景観専門委員会からの意見

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（第2回まちづくり検討委員会、第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見3）

		上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係ると思われる事項	第2回まちづくり検討委員会、第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見	原風景	・中州を中心に見たときの剣先川や中の島は、水郷松江の原風景		・水田の中を帆かけ舟が行く（松平不味公が梁山公園の上から大橋川の方面を眺めてのお国自慢） ・大橋川の原風景は、中州として残っているような場所がもっと湿原であった時代の景色では
		水辺・水面・親水性	64.大橋～新大橋間の右岸に桜と柳を植える 65.上流の河岸にふさわしい木は柳なのか松なのか ・（ラフカディオ・ハーンの記述では）大橋川に民家の障子を通した明かりが映って、これこそなくしてほしくないもの、とある ・川底の砂地や藻が見え、潮のにおいがする ・入ろうと思えば入れる川が目の前にある（何カ所か石積みで降りられるところがある）	66.中・下流部には桜・柳・ナンジャモンジャなどの並木をつくり、新しい景観をつくりたい	49.水辺の美しさを大事にする 50.水辺の近さを大事にする 51.目線と水面高が近い点 52.街と水辺の一体感 53.水面との近い関係を保持する 54.人が寄り合う場所では、それぞれが居心地のいい空間を確保できるよう設計する 55.まちと水辺の一体感を重視して親水性を求める場所と、遊歩道や公園などの憩いの場所とを区分けして整備をする必要がある 56.歩行者中心の親水空間を創出する 57.耐水性と親水性を上手に調和させた街づくり 58.柵・手摺に頼らず、自然な形で河岸の安全を保持する 59.水際にむやみに柵を設けない。 60.河岸はできる限りゆるやかでやわらかい形としたい 61.河岸には緑（植物）を入れる 62.水辺の緑は単一的な植栽ではなく、高木・低木などさまざまな緑を複合的に取り入れる 63.水辺に降りられる階段を設ける ・エリアごとに水との距離感や水との触れ合いの度合いをどういうコンセプトで保っていくのが重要 ・非常に水辺に近いという特徴
		川沿いの遊歩道・憩いの場・にぎわい空間	77.若者が集う水辺のイベントスペース、野外ステージなどのにぎわい空間の整備 78.まちの中に緑が少なく、また、庭園のような公園が多いので、松にこだわらず、木陰で憩える場を作ってほしい 79.人々がふれ合えるような舟溜まりの整備 80.橋詰め広場の整備 81.河岸は人優先の道路とすべき 82.そぞろ歩きのできる遊歩空間を作る 83.橋の下をくぐれる遊歩道がほしい 84.大橋～新大橋間に、人々が水に親しめる回遊歩道を整備 85.上流左岸の川沿いに遊歩道をつくる 86.上流左岸は堂島川の難波橋付近を、右岸は鴨川の遊歩道を参考にする 87.上流右岸は自動車の通行を禁止するとともに植栽、石垣を工夫する 88.アンケートで柳並木は好きな場所として上がっている	89.中州は、ニューヨークのセントラルパークのような広大な森林公園としたい 90.中州の川沿いに遊歩道を整備 91.中州の川沿いにジョギングができるような遊歩道を整備 92.美しい景観を気軽に楽しめるサイクリングロードの整備 93.下流左岸に、川沿いの遊歩道を整備 94.下流域から島根半島全体を見据えたサイクリングロードの整備をしたらどうか	67.水辺をできるだけ歩ける空間にする 68.リバーウォークができる歩道づくり 69.遊歩道を水面近くに設ける 70.住民が水と親しむ憩いの場の整備 71.多目的に利用できる川原の整備 72.護岸や遊歩道は単調とならないように工夫する 73.河道内遊歩道の舗装を工夫する 74.下流域から上流域までをつなぐサイクリングロードを作る 75.施設（ハード）を考える上では、人が集まるような仕掛け（ソフト）を創る必要がある 76.木陰などの緑が少ないエリアは人の集まり、賑わいにつながらない

茶色字は第4回景観専門委員会からの意見

景観形成の基本方針検討において参考とすべき事項（第2回まちづくり検討委員会および第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見4）

		上流部	中流部	下流部	全域に関わるもの
景観形成の基本的な考え方に係わると考えられる事項	第2回まちづくり検討委員会、第3回合同委員会、第4回景観専門委員会からの意見	治水			
	めざすべきまちのイメージ	<p>95.左岸の穴道湖大橋から大橋までの間は、上流部の築堤に近い形の堤防にする</p> <p>96.左岸の大橋から新大橋までの間は、河岸の道路は洪水時には冠水する低い護岸堤にする</p> <p>97.左岸の新大橋からくにびき大橋までの間は、築堤する。</p> <p>98.世界に例のない斬新なデザインの堤防をハイテクを駆使してつくってはどうか</p> <p>99.松江にマッチしたスーパー堤防を検討する</p> <p>103.五感で感じることでできるまち</p> <p>104.上流部においては中心市街地として既存の商業集積や観光スポットの集積を活かしたまちづくりを進める</p> <p>105.川に面した街づくり</p> <p>106.上流部左岸は背後地の東本町を含め、広域でとらえた街づくりをデザインした方がわかりやすい</p> <p>107.上流の橋北は松江城や堀川を中心とした古いものや文化的なものを尊重した整備が必要</p> <p>108.上流の橋南は都市的发展にふさわしい整備が必要</p> <p>109.上流右岸は新しいイメージにするのか古いイメージにするのか検討が必要</p>			<p>100.古いものを大切にだけでなく、新しいものを加えて新しい歴史を作っていくという視点も大切である</p> <p>101.何もかも上流部でやろうとするのではなく、上・中・下流それぞれの特性をふまえ、バランスの取れた整備を考える必要がある</p> <p>102.親水性の創出と洪水対策とは分けて考える</p>

茶色字は第4回景観専門委員会からの意見